ストライキを復活させよう・・・「労働力」の安売りはしない

全米自動車労組のビッグスリーが40％の賃上げを求め同時スト（最大４万５千人がスト突入）を行い、25％の賃上げで妥結した。連合の24春闘の要求額が「定昇額含めた５％」というささやかな要求と比較すると桁違いの数字に愕然とする。スト件数も１９７０年代には５０００件を超えていたのが、近年は30件代まで激減した。

そんな中、昨年、連合傘下の「そごう・西武百貨店」の労組が、61年ぶりのストをうった事は、マスコミでも大きく報じられ、注目を浴びた。このストライキに対する市民の反応は、「ストは迷惑」ではなく、むしろ連帯、応援の声が聞かれた。

私の元職場で、昨年末一時金について、団交で経営難を理由に過去最低額が提示された。「この物価高の中、子育てや、住宅ローンを抱えて、それではとても生活できない」と、危機感を持った若い組合員がチラシをつくり、傍聴を呼びかけると、次の団交には部屋に入りきれない傍聴参加があった。結果的に＋０・２ヵ月の上乗せができ、数名の新規組合加入者も獲得。行動することの大切さを実感した。また、上部団体である全国一般東京労組のＴ分会では、年末一時金の超低額回答を跳ね返すため、「理事会は、労働者の一時金を調整弁にするな！」と20数年ぶりのストライキを決行した。春にも処遇改善を求めて闘うと頑張っている。

23春闘では前年の三倍近い約３４０件のスト件数となっている。ストは復活しつつある。許せない要求をはっきりさせ、「怒り」を団結して闘う力にしていきたい。

黙っていても誰も変えてくれない。自ら声を上げる事でしか変わらない。24春闘頑張ろう！

労働大学企画編集委員　高原　康子